

わが体験と抱負

一般文化 部門化

昭和29年、江戸時代から300年続く農家の長男として、東京都練馬区で生まれました。物心ついた頃から祖母や両親から農家の後継者として、農業をすると言われて育ち、昭和52年、東京農業大学を卒業後就職しました。就農後しばらくして、地元の大泉農協(現J A東京おおば)の青壮年部に入部し、仲間との技術交換や交流活動、そして農政運動へと活動を広げていきました。

昭和の終わりから平成の初めにかけて、ガット・ウルグアイラウンドのテーブルでは米を中心とする農産物の総自由化が迫られていました。ちょうどそのころ、東京、大阪、名古屋圏を中心とする3大都市圏の市街化区域内農地には、宅地並

の税金がかけられようとしていました。パブル景気に浮かれた、土地投機による一獲千金をものむ開発業者たちの都市農業つぶしが横行していたのです。都市に農地があるから地価が高騰する

地は昭和40年代の半ば、農林水産省の施策からはずれば建設省(現国土交通省)の傘下となりました。しかし、高度経済成長の波にもまれながらも、しぶとく生き続ける筋金入りの農家は決して少なくありませんでした。

という、都市農業者にしろなかで、多くの盟友の推薦をいたたき全国農協青年組織協議会委員長とする農地を選択すると、向こう30年間は農地以外の利用はできなくなる。宅地化する農地を選択すれば、農地に重税が課せられ営農は不可能となる。さで、どちらを選択するか、まるで踏み絵のような選択が迫られたのです。平成3年、東京都農協青壮年組織協議会委員長として、農協の諸先輩方とともに都市農地と都市農業を守る「宅地並

るなかで、多くの盟友の推薦をいたたき全国農協青年組織協議会委員長として、農畜産物の自由化する農地を選択すると、反対運動に明け暮れました。当時を思い起こして、私は、私たち農業者のおかれた立場は地方も都市もありませんでした。あれから二十有余年、

農家が地域住民に農作業を指導し授業料をいたたきという農業体験農園も仲間のアイデアから生まれました。消費者あつての農業、地域とともに共生する農業。それが私たち東京の農業者が見いだした結論でした。

推薦の言葉

白石氏は、東京都内の300年続く農家で、約100種類の野菜とブルーベリーを生産販売。氏は「百姓」の定義を「命と環境を慈しみ、生きるものの糧を生み出す仕事」とする。これが農業哲学でもある。

命と環境を慈しんで

となり、農水省まで動かすことになった。また氏が運営する「風のがっこう」では、体験農園として農地を125区画提供。畑作で、年間20種類ほどの野菜を露地栽培している。体験農園は、生産緑地との関係から自らの農業経営として取り組んでおり、新しい都市農業のビジネスモデルとなっている。

都市農業は地域と共生

のだと。経済評論家はテレビで農地を宅地化すれば地価は下がるという、まことしやかな解説をしていました。

「宅地並み課税反対運動」に邁進しました。そうしたなかで平成3年施行された「改正生産緑地法」は、都市部の農地を保全する農地と宅地化する農地に二分しよう

に就任し、仲間たちと新たな運動に取り組みしました。厳しい制度にはなつたが、改正生産緑地法を積極的に受け入れ「都市農業新時代・おれ達の選択」と題してフォーラムを開催し、これからも都市農業のみちを歩もうと

が吹き続けました。しかし、そのまま滅びていくわけにはいかない。都市の中で、消費者と農業者の間に生きるすべをしたところで始まっていること

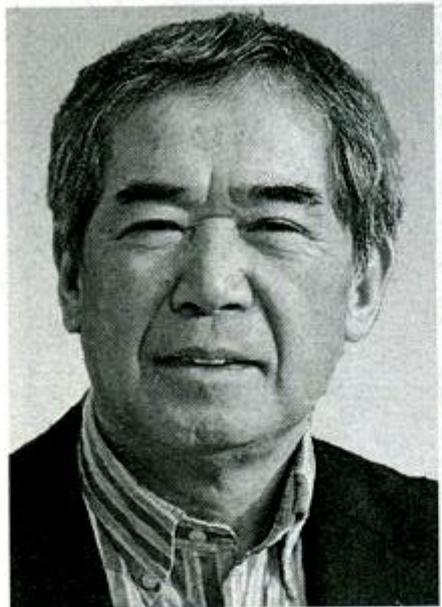
者の中で、消費者と農業者の間に生きるすべをしたところで始まっていること

者の中で、消費者と農業者の間に生きるすべをしたところで始まっていること

者の中で、消費者と農業者の間に生きるすべをしたところで始まっていること

者の中で、消費者と農業者の間に生きるすべをしたところで始まっていること

白石好孝氏



東京・NPO法人畑の教室理事長
白石農園経営

らしい・よしたかの「がっこう」を開園、

15年NPO法人「畑の教室」理事長。19年練馬区農業体験農園園主

「都市農業宣言」を採択

直販による地産地消の

実践、きめ細かな販路の

開拓、食農教育の実践も

早期に取り組みました。

全国的に注目されている、

昭和52年東京農業大卒。54年就農、平成4年全国農協青年組織協議会委員長、9年農業体験農園「大泉風

大学各員教授。

終交渉段階を迎えつつあ

全国的に注目されている、



食農教育で農業体験する中学生

鮮で安全な農産物を供給し、防災、受け止める感性と、帆の環境の保全、張りようが問われる時代です。今後、ささやかながら農協運動の一員として農業の未来を見つめていく所存です。